ESSAY エッセイ

連載企画「九州大学で活躍する女性研究者」

第6回は森林環境政策の合意形成に向けた科研費プロジェクトを推進中の佐藤宣子氏です。

佐藤　宣子（さとう　のりこ）

専門分野：
森林政策学

理系の中で社会科学研究
～フィールドワークの面白さに魅せられて～

私は農学部出身ですので、大学入試は理系で受験しました。農学部に入学後、学部2年後期の学科配属の際、山登りが好きで、林学科（現、地球森林科学コース）を選択しました。林学科は森林と林業の技術者や研究者を育てるために、授業では理系科目と経済学や法学などの文系科目がありました。授業を受けるうちに文系の方が向いているのではないかと思い始め、3年後期の研究室配属時に学科内で唯一の文系研究室である林政学研究室（現、森林政策学研究分野）を選択し、文系へ転向しました。そのため、社会科学研究者ではありますが、測量士補資格と林業改良普及員免許を有しています。

研究者になろうと思ったのは、修士論文作成のために訪れた熊本県産山村で出会った区長さんの話がとても面白く、現地に行ってインタビューをするフィールド調査に魅了されたことです。研究の内容は、森林と地域社会との関係性を調べて、制度的な課題を考察することです。「得意なことは？」と問われたら、山道運転と住宅地図をみて（当時、ナビはなく…）目的地に到着できることです、と答えます。

フィールドを大切に、異分野研究者との学際研究

林学研究は私が研究者になった当時、完全な男性社会であり、学会でもフィールド調査地でも女性というだけで珍しがられました。その分、注目されるわけで、膨らんだ注目に見合った成果が要求されます。失速しないためには、好きなフィールド調査を徹底して行うことしかないと九州の山村集落に「出没」し、時には子連れでフィールドデータを収集しました。博士課程修了後、4年間、大分県職員となって現場に近いところでフィールド調査に没頭できたことも調査スキルを上げることに役立ちました。また、地域の方々との関係を大切にする作法もその時学びました。30年以上お付き合いしている集落や林業者の方も多くあり、今も携帯電話やSNSでつながっています。

また、理系の中での社会科学研究者という立場は、理系の中でも、文系の中でも異端といえますが、多くの学際研究に誘っていただく機会があり、近年では学際研究を研究代表者として取り組む時には強みになると感じています。

年齢を逆算して考えると楽になった

文系研究者として研究の大きな目標は、単著を出版することです。40代までは子育てに追われ、論文は書いても、それをまとめて単著にすることができませんでした。男性研究者が書籍を刊行していくのを見ながら、鬱屈した気持ちになりました。しかし、子育てが終わったので、50代から頑張ろうと思った時、ふと気づきました。同年代の男性研究者よりも、平均寿命が長い分、残り時間が長いだろうことを。年齢を逆算して考えると楽になった気がします。

なお、来年還暦を迎える年になって、今年ようやく単著を出版することができました。

略歴

九州大学大学院農学研究科博士課程修了、大分県きのこ研究指導センター研究員を経て、九州大学農学部助手、同農学研究院助教授を経て2007年に九州大学大学院農学研究院教授に就任。2017年から農学部附属演習林長を兼務。NPO法人九州森林ネットワーク理事長も務める。

新型コロナウイルス感染防止対策のため、今回はインタビューではなくエッセイとしております。